

みんぱくリポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

アラビアンナイト：ファンタジーの源流を探る

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2013-02-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西尾, 哲夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4799

中世アラブのミステリー ホームズの先人たち

毒殺の方法——ドゥバーン賢者と本の秘密

アラビアンナイトの中には、ミステリー仕立ての話もいくつか入っています。古層に属する「漁夫の話」の支話である「ギリシアの王とドゥバーン賢者の話」には、ウンベルト・エーコの傑作ミステリー『薔薇の名前』（東京創元社）で使われているものと同じトリックが登場します。

「ギリシアの王とドゥバーン賢者の話」は、恩知らずの国王のために斬首されることになつた医師の復讐を語つた物語です。王は難病に苦しんでいたのですが、ドゥバーン賢者の治療によつて平癒^{へいゆ}することができました。ドゥバーン賢者は秘薬を練りこんだポロ用のスティックをつくり、これを王に献上したのです。ポロに興じていた王がおおいに汗をかくと、手に握つていたスティックから秘薬が体に浸みとおつて病が治癒したのでした。

しかし悪宰相の讒言(ざんげん)を受けた王は賢者を疑うようになり、命をとってしまうことにしました。賢者は最後の願いとして世界中の不思議が記された本を献上させて欲しい、自分の生前の前でその本の内容を声に出して読めば、生首となつた自分は王の質問すべてに答えるでしょうと言つたのです。王は賢者の答えを聞きたい一心で、指に唾をつけながらもどかしく本のページを繰っていたのですが、ページには毒が塗つてあつたのです。中国の奇書『金瓶梅』をめぐつてもこれと同じような伝説がありますし、新しいところでは本を切手に置き換えたトリックも登場しています。



ドウバーンの首の前で本のページを繰る王。ジョン・バッテン
画 (1893)

ところでこの話は、粹物語とは対比的な構造になっています。斬首を宣告された賢者は「ワニの話」について触れます。それはどのような話かと王が訊ねるのですが、賢者は「このような状態ではとても話を語ることはできません」と答え、

結局「ワニの話」は語られませんでした。つまりシェヘラザードやそれに続くいくつかの物語の登場人物たちは、話をすることによって命を得るのですが、この賢者は話を語ることなく命を失っているのです。これについては初期の編集に含まれていたと思われるもう一つのミステリー「三つのリング」を紹介するさいに、もう一度確認してみましょう。

迷子のラクダのモンタージュ画像——ヤマン(イエメン)の王子たち

あまり有名な話ではないのですが、バートンがウォートリー・モンタギュー写本から訳した「ヤマンのスルタンと三人の息子の話」(バートン版補遺所収)の前半に登場する迷いラクダのエピソードは、アンソロジー『クイーンの定員(一)』(光文社)に収録されているヴォルテール作「王妃の犬と馬(『ザディグ』所収)」や、エーコの『薔薇の名前』の冒頭部で使われているものと同じです。

バートン版の「ヤマンのスルタンと三人の息子の話」は、次のような筋立てになっています。

ヤマン(イエメン)のスルタンには三人の息子と一人の娘がいた。スルタンの死後、息子たちは遺産の分配に納得できなかつたので、別のスルタンに意見を求めることにした。道中で見つけたラクダの足跡から、そのラクダの特徴を言い当てたのだが、そのラクダ

が迷いラクダだつたため、持ち主からラクダ泥棒とまちがわれてしまふ。スルタンのもとに話がとどき、兄弟たちはラクダの特徴を推理した理由を述べる。感心したスルタンは三人に食事を出してもてなす。兄弟たちは食事をしながら、料理女が月の障りのさいちゅうであること、料理につかわれた子ヤギが雌犬に育てられたこと、スルタンが不義の子であることを見抜いてしまつた。それぞれの理由を聞いて驚いたスルタンは、遺産の問題は自分たちで解決するようによすすめる。兄弟たちは父の遺言にしたがうことで同意した。

エラリー・クイーンは「クイーンの定員」の解説で、「ミステリーの起源は旧約聖書のカインとアベルの物語に置くのが通説だが……千夜一夜物語には探偵小説の思春期的徵候が各所に見られる」と述べています。迷いラクダの特徴を言い当てる話はユダヤ教の口伝律法であるタルムードにも登場していますし、「アルフ・ライラ」に関する記事を残したアッバース朝期の文人マスウードィー、アッバース朝の歴史家タバリーの著作にも出てきます。それだけではなく、セレンディピティ（偶然に何かを見つけ出す能力）の語源となつた「セレンディブ（セイロン）の三人の王子」という物語中の挿話として、英語圏ではかなり広まつていたようです。

「セレンディブの三人の王子」という物語はペルシア語からイタリア語に訳されたとされて

おり、現在確認されているところでは、十四世紀に書かれたアミール・ホスロー作のペルシア語詩『ハシュト・ベヒシュト（八つの楽園）』に初めて登場したとされています。ちなみにセレンディピティという英語を最初に使ったのは、『オトラント城奇譚』の作者ウォルボールでした。彼は子どものころに「セレンディブの三人の王子」を読み、そのときの感慨をもとにこの言葉を作ったのだそうです。

迷いラクダをめぐるエピソードを最後まで確認しておきましょう。王子たちは、問題のラクダが片目で尻尾がなく、背中の片方には甘い食べ物、もう片方には酸っぱい食べ物を積んでいたことを見抜きます。これは、草を食んだ跡が片側にしかなかつたのは片方の目が見えないからであり、ラクダは糞をしながら尻尾を振り回して糞をまき散らすのに、糞が一箇所にたまっていたのは尻尾がないからであり、ラクダがいた場所の片方には蠅がたかっていたのにもう片方には蠅がいなかつたのは、片方には甘い食べ物、もう片方には酸っぱい食べ物を積んでいたからだと考えたのでした。

ホームズの先人たち——老王の眼力

ご存知名探偵シャーロック・ホームズは、外見からその人の職業を言い当てるという特技の持ち主でした。このようなホームズ像は、作者であるコナン・ドイルの恩師であつたジヨゼフ・ベル博士がモデルになつてゐるとされています。病気の診断には何よりも観察が大切

であるというの、ベル博士の持論でした。ドイルの自伝には、次のようなエピソードが紹介されています。

(ベル教授は市民の服装をした) 患者にこう質問した。

「軍隊におられましたね?」

「ええ」

「除隊してまだそれほどたってない」

「そうです」

「スコットランド高地連隊でしよう」

「そのとおり」

「下士官だった」

「そうです」

「西インドのバルバドス諸島にいましたね」

「まったくそのとおりです」

驚く患者や医学生を前に、ベル教授は種明かしをします。「この紳士は礼儀正しい人だが、帽子をとらなかつた。軍隊では帽子をとらないが、除隊してから時間がたつていれば市民社

会の作法になじんでいたでしょう。堂々として貫禄があるし、どこから見てもスコットランド人だ。象皮病の症状があるが、これは西イングランド諸島の風土病でイギリスにはないからね」アラビアンナイトにもベル博士のような人物が登場します。「ヤマンのスルタンと三人の息子の話」に登場する三人兄弟も訪問先のスルタンの素性を見抜いてしまいますし、バートンがブレスラウ版から訳した「真実の姿を見抜いた王の話」（バートン版補遺所収）では、次のような話が展開します。

世を捨てて旅に出た老王と王子が行き暮れてしまい、老王は奴隸市場で自分を売るようになると、王子はむしろ自分を売つてほしいと言うが、老王の言いつけにはそむけず、奴隸市場で老王を売ろうとする。奴隸商人が「この老人は何ができるのか」と訊ねると老王は「自分は宝石や馬や人の真価を見抜くことができる」と答える。その町の王の料理頭が老王を買い求める。老王は大きな方の真珠には虫が潜んでいること、良馬と見える方の馬が早く息を切らせること、自分を買った王が実はパン屋の息子であることを見ぬき、たいそうなほうびを得た。

王子たちの推理法——フィラーサ

ヤマンの王の三人の息子たちと、奴隸に売られた老王は、どのようにして見えているものから見えていないものの姿を推測したのでしょうか。ネタバレになってしまふのですが、どちらの話も日本語訳のバートン版には収録されていませんから、ここで彼らの探偵法を確認しておきましょう。

まずはヤマンの王子たちの話からです。食事を出してもてなしてくれた王との一件については、出されたパンの中に粉が残っていたのは料理女が生理中でパンをこねる力が弱ついたからであり、肉の外側に脂身がついているはずの子ヤギの脂身が骨のそばにあったのは、その子ヤギが雌犬の乳で育てられたからであり（犬の脂身も骨のそばについているため）、王が自分たちと食事の席をともにしなかつたのは王が卑しい生まれであるからだというわけでした。

次に奴隸に売られた老王の場合を見てみましょう。大きな真珠の中に虫がいるとわかつたのは、老王がその真珠に触るうちに真珠がかすかに温もつてきたからでした。彼の説明によれば真珠の核となるのは雨のしづくであつて「冷たい」という性質を持つてゐるため、手で触つても温まらないはずなのです。しかるにその真珠が温まつてきたのは、その中に何かの生き物がいるからだというものでした。また良馬と見える馬は老馬の子どもなので、若い

馬から生まれたものよりも早く息切れすると説明します。そして王が王の息子であつたらほうがびとして自分に宝玉の類を受けたであろうし、法官の息子であつたら大金を、商人の息子であつたらそれなりの金を受けたはずなのに、王はパンをくれただけだった、つまり王はパン屋の息子だからだと結論したのです。物語中では、これらの推理はすべてあたっています。

王子たちや老王の推理の中には、現代人の常識から見れば荒唐無稽としか思えないものもあるのですが、外の様子から内に隠されたものを見ぬくという点では共通しています。このように外見から内実を推測するやり方は、アラビア語でフライーサと呼ばれています。

フライーサという言葉は馬を意味するファラスから派生しており、本来は馬市場で馬を適正に評価するためのものだつたようです。中国や日本でも、馬の体つきや毛色などからその馬の性質や価値を推しはかることがおこなわれてきましたが、アラビア語文献にも馬の鑑別法が記録されており、それによると、良馬の相とは額に白斑があり、蹄の上に白い脚毛もしくは白い斑紋があるものとされていました。ちなみに『三国志演義』にもこれと同じく額に白斑、脚に白毛のある馬が登場するのですが、こちらでは主人にたたりをなす凶馬の相として描かれています。劉備の馬「^{てきろ}的盧」です。

アラビアンナイトにはフライーサが出てくる話がいくつか入っているのですが、なるほどと思わせる展開になつてている場合もあれば、推理というよりは人相占いに近い内容のものもあります。

本格的な謎解き話——三つのリンゴ

最後に本格的な謎解き話「三つのリンゴ」を確認しておきましょう。この話は最初期のアラビアンナイトに収録されたと言われており、次のような展開になっています。



最古の挿絵入りアラビアンナイト写本（マンチェスター大学図書館蔵）に描かれた馬

ハールーン・アッラシードがお忍びでバグダードに出かけた。ティグリス川のほとりで出あつた老漁師の網に頑丈な木の櫃^{がんじょう}がかかつた。中には若い女のバラバラ死体が入つていた。カリフはジャアファルに「三日のうちに犯人を捕まえなければ一族もろとも吊るし首にする」と厳命する。ジャアファルが死を覚悟していると、若者と老人が「自分が犯人だ」と名乗りでてくる。カリフの前に二人を連れていくと、本当の下手人は若者の方であったことがわかる。殺された女は若者の妻で老人はその父親だ

つた。若者と妻は仲良く暮らしていたが、病床の妻がリンゴを欲しがるのでバスラまで行つて三つのリンゴを買つてきた。妻はリンゴには手をつけなかつた。妻の病気がよくなつたので市場に出かけるとリンゴを持つた黒人奴隸に出会つた。どこでそれを得たのかと訊ねると情婦のところだ、そいつの夫がバスラから買つてきたのだと答えた。家に戻ると三つあつたリンゴが二つしかなかつた。妻に問いただしても知らないと言い張るので、思わず手にかけてしまつた。死骸を櫃に入れてティグリス川にほうりこみ、家に戻つてくると長男が泣いてゐる。理由を訊ねると、母親の枕元にあつたリンゴを持つて遊びに出たところ、知らない黒人奴隸にリンゴをとられてしまつた、病氣のお母さんのためにお父さんがバスラから買つてきたのだから返してくれと頼んだが、黒人はそのままどこかに行つてしまつたと答えた。カリフは「若者の罪は赦し、黒人奴隸を吊るし首にする。ジャアファールがその黒人を見つけられなければ代わりにジャアファールを吊るし首にする」と言い出す。ジャアファールは黒人を見つけることができず、家族に別れを告げようとすると末娘がリンゴを持つていて気づいた。娘に訊ねると、家で使つてゐる黒人奴隸のライハーンが持つてきたと答えた。ライハーンを問いつめると、そのリンゴは市場で知らない子どもからとりあげた、その子が言うには病氣の母のために父がバスラから買つてきたのだと言う。ジャアファールはライハーンをカリフのもとに連れていき、その命をたすけるという条件でカリフに別の話（「大臣ヌールッ・ディーンとシャ

ムスッ・ディーンの物語」）を聞かせた。話に満足したカリフはライハーンを赦すことにした。

あらすじからもわかるように「三つのリング」は緊密に構成された謎解き話であり、それと同時に粹物語とパラレルな関係になっています。シャフリヤール王の王妃は黒人と密通して殺され、王の怒りのはけ口となつたシェヘラザードは物語を語ることで命をつなぎます。同じように若者の妻は黒人との密通を疑われて殺され、カリフの怒りのはけ口となつたジャアファールは、「これよりもおもしろい話を聞かせるので、黒人奴隸の命を奪わないでほしい」と願いでて成功するのです。

この回では、ミステリー仕立てになつていてる話をいくつか紹介し、アラビアンナイトには、文学的な効果を意図して念入りに構成された作品もあれば、民間で広まつていた言い伝えの類をほとんどそのままの形で書き記したのではないかと思われる作品もあることを確認してみました。そしてそのいずれにも捨てがたい味のあるところが、アラビアンナイトの魅力なのでしょう。